

COLUMN

鎌倉の猫事情 第十七話

ある晩の事です。
ある晩というのをもう少し具体的に説明致しますが、が、どうせなら今までのいきさつからお話ししないとじっくりきません。
この猫事情も十七話になったわけですが、最近お話の順序が前後してしまっていますので、このあたりで一度整理して置きたいと思えます。まず先代のシュガーちゃんが、一週間ほどの短いわずらいの後、長寿をまっとうし天国へと旅立ったのが三月の始め、まだ肌寒い季節でした。悲しみに暮れて弔いました。彼女の一周忌を向かえる頃、ミルクホールの厨房スタッフから「このまま猫がいない状態が続くのはいかなものか、やはり料理店には猫が必要では」という声があがり、待望の鼠退治用ネオキャットとしてグーニー君が骨董やの古田さんの手をへてもらわれて来たのです。シュガー没後、一年経った四月十八日のことでした。この子猫がなかなか手の掛かる子猫であった上大変な寂しがりやであった為、同年七月十八日、グーニー君の許婚として、小牧の骨董やの梅野さんからスウィービーちゃんを、貰い受けて来たのでした。どの猫も十八日にもらわれて来ているのは不思議だとは思いませんか？
十八日というのは、とある場所で骨董市の立つ日で、この日に合わせて業者同士の取り引きがあります。で、猫もついでにその日に取り引きされるわけです。骨董やさん達が朝まだ暗いうちから猫の取り引きをしている様子、本当に可笑しいです。確かこの話もしましたっけ。さてこうしてまだ幼い許婚同士は、共に暮らし始めたのです。
最初は、なんとなく恥ずかしそうなんだか、気に入らないんだか、少し離れてお互いを見ていたのですが、一ヶ月もすると格好な遊び相手となって、仲良く走り回っていたのです。
ずいぶんとすっ飛ばしましたが、ここまでが先月号までのお話です。そう、その頃の事です。二匹が仲良く暮らし始めた頃の事です。

お盆も過ぎたある晩の事、不思議な出来事が起こったのです・・・
夏の盛りは越えたとはいえ、夜になっても暑さはおさまらず、家中の窓を網戸にして開け放し、襖や障子(もうとうに穴だらけでしたが)を開けて風通しを良くして、寝ていました。猫はどうしてあんなに夜中に遊びまわるのでしょか。グーニーとスウィービーは、家の中を広くさせて冷たい床の上で寝ている私の上を乗り越えては、あっちへこっちへ走りまわっています。たぶんその日は、死にかけていた油蟬が、部屋へ迷い込んできたのを、二匹で興奮してじゃれて、見るも無残にバラバラにしてしまい、満足至極だったのだと思います。二匹とも異常に興奮していました。二匹はすごいスピードで開け放たれた家を隅から隅まで走りまわっていました。そして、今度はキッチンに上がりこみ、台所用の蛍光灯のスイッチが紐になってぶら下がっているのに二匹で交互にじゃれ始めました。スイッチの紐についている小さな玉っていうのでしょうか？ 電気を消すと青く光るようになっていて、あれにじゃれているのですから、カチカチいいながら電気が消えたり点いたり、それも面白かったのでしょう。いつまでもやっているのです。その内にどちらかが飽きたのでしょう。また家中を走り始めました。その間も、カチカチ、電気が点いたり、消えたり、そしてまたどたばた、どたばた、カチカチ、カチカチ・・・
もう、どうにも眠れやしない。

「あんたたち、いい加減になさいよ！」と、起きて振り返ると、私の横に、二匹ともいではありませんか。その間も、キッチンでは、カチカチ、カチカチ、電気が点いたり、消えたり・・・
ええ！！？？ あんた達、ここに居るの？？
じゃあ、あれはいったい、？？？
二匹の猫達も、ぼんやりと私の顔を見ました。すると、電気の点いたり、消えたりもやみました。
私には、はっきり分かります。あれは、確かにシュガーちゃんでした。一緒に遊びたかったに違いありません。猫の幽霊が居たっていい筈です。シュガーちゃんは生涯独身でした。気ままな猫でした。寂しいんじゃないかなんて心配してあげた事ありません。天国が退屈ならいつでも遊びに来てね。で、ミルクホールを、守って下さいね。
勝手な言い分ですけど・・・

to be continued

WANTED

皆様をお願いします。
愛らしいミルクホールの猫夫婦にまたまた子猫が誕生します。里親になって下さる方いらっしゃいましたらミルクホールまで、ご連絡下さい。
色、柄、性別未定です。四月半ば出産予定です。



TRIP

羅白にて

バスは、綺麗に舗装された道を何時間も走り続けた。道筋には、ただ白い平原と小高い山が続くばかりである。途中、道路に沿って林があった。林の中から二頭のエゾシカが顔をのぞかせた。こうやって、餌を探して顔を出して来るのは雌のシカだそう。確かに角がない。雄はどこで何を食べているのだろう。長時間バスに揺られ、白い風景にも慣れて少し退屈し始めたとき、目の前がひらけて、北の冷たい海があらわれた。海の向こうに雪をかぶった大きな島が、ながながと横たわっている。国後島である。もう羅白は近い。
海は、波打ち際全体が氷でおおわれている。この一帯は外海のはずだけれど、それでも海が凍っている。外海が結水することは大変珍しく、何十年も見られなかったそうである。感覚的にも、波打ち際が凍る・・・という事は想像が出来ない事であるが、現実に、今目の前で凍っているのが見えている。凍った海の向こうに見える国後島はいっそう不気味な威圧感がある。波打ち際から少し沖にかけて、凍ったところは薄いブルーの色に見える。さらに沖の方は深い青色に変わり、時折り白く見えるのは、流氷である。流氷は一度流れ着いたけれど、風が吹いて押し戻されたらしい。その後また流れ着こうとすると、海が凍って近づけなくなったという。沖に浮かぶ流氷の廻りには、カモメと大鷲が群れて飛んでいた。夜になると国後島の山の向うから、真っ赤な月が昇った。半月である。何故かは知らないけれど月が赤い。地の果てへ来たような気がした。

